

ねられた学園

T a k u M a y u m u r a

眉村 卓





講談社文庫

常州大学図書館
蔵書章
ならわれた学

眉村 卓

講談社

著者 眉村 卓 1934年大阪市生まれ。大阪大学経済学部卒業後、耐火煉瓦会社勤務の傍らSF同人誌『宇宙塵』に参加。1961年、「下級アイデアマン」が『SFマガジン』のコンテストに佳作入選し、コピーライターを経て1965年より専業作家となる。1979年『消滅の光輪』で第7回泉鏡花文学賞と第10回星雲賞を受賞。1987年『夕焼けの回転木馬』で第7回日本文芸大賞受賞。1996年『引き潮のとき』で第27回星雲賞受賞。『ねらわれた学園』『なぞの転校生』など、1970年代に発表されたジュブナイルSFは10代の読者を中心に絶大な人気を博し、何度も映像化されてきた。近著に『僕と妻の1778話』『沈みゆく人』『しょーもない、コキ』など。2012年6月より、出版芸術社から「眉村卓コレクション」の刊行が開始された。

ねらわれた^{がくえん}学園

まゆむら たく
眉村 卓

© Taku Mayumura 2012

2012年9月14日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——慶昌堂印刷株式会社

印刷——慶昌堂印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277168-9

ねらわれた学園 目次

1	黒板の落書き	6
2	ふしぎな力	24
3	校内パトロール	54
4	つかまつた吉田一郎	72
5	たたかう二年三組	92
6	宣告	120

7 思わぬなりゆき

138

8 みんな、腕を組め！

160

9 戦闘開始だ!!

186

10 西沢響子の家へ

202

11 英光塾での対決

214

12 はたして終わったのか？

232

講談社文庫版あとがき

240

解説 日下三蔵

242



講談社文庫

ねらわれた学園

眉村 卓

講談社

ねらわれた学園 目次

1	黒板の落書き	6
2	ふしぎな力	24
3	校内パトロール	54
4	つかまつた吉田一郎	72
5	たたかう二年三組	92
6	宣告	120

7 思わぬなりゆき

138

8 みんな、腕を組め！

160

9 戦闘開始だ!!

186

10 西沢響子の家へ

202

11 英光塾での対決

214

12 はたして終わったのか？

232

講談社文庫版あとがき

240

解説 日下三蔵

242

ねらわれた学園

1 黑板の落書き

新学年がはじまつて何日か過ぎた——日のあかるい朝である。

いつものとおり、母にさんざんうながされてからベッドを出た関耕児は、あわただしく服を着、トーストをかみくだした。

「ほんとうに、もう少し余裕を持って起きればいいのに……朝寝坊のクセまで、お父さんそっくりなんだから」

母が、文句をいう。

もちろん父は、知らないふりをして、朝刊を読んでいた。

「行つてきます！」

耕児は飛び出した。

出たところは、左右に伸びる廊下である。この八階建ての南大阪団地^{みなみおおさか}は、一階が商

店で、二階からが住居で、中央に、エレベーターホールと主階段があるのだ。

急ぎ足で来たものの、エレベーターを待つのがもどかしいので、彼は、例によって、階段をかけおりた。

学校までは、五分とかからない。団地を出たところから、六車線の道に作られた横断歩道を渡り、百五十メートルも走れば、阿倍野第六中学校の校門なのだ。こういう事情だから、ぎりぎりまで寝ているという習慣がついたのかもわからない。もつとも、彼の名誉のためにいつておくならば、毎朝の目がまわるようなスケジュールにもかかわらず、彼は、中学生になつてから、一度も遅刻したことがなかった。

予鈴を聞きながら、彼は校門をくぐり、二年三組の教室に走りこんだ。
セーフである。

一年のころには、耕児のこの登校は、クラスの一種の名物になつていたが、今は、そんなことはない。あたらしいクラスになつて間がないので、名まえを知らないクラスメートも多く――クラス全体が、まだバラバラの感じなのである。

しかも、この日は、だいぶ様子が違っていた。

生徒たちのうち、着席しているのは、半分もないのだ。あとは、黒板の前にむら

がつて、わいわいがやがやと、いい合っているのだった。

「どうしたんだ？」

耕児は、カバンを置くと、隣の席の楠本和美くすもとのかずみに、声を投げた。

楠本和美は、読んでいた本から目をあげて耕児を見た。本といっても、教科書ではない。小説なのだ。耕児は、同じ団地の、同じ階に住む和美を、小学生、いや、もつと小さい時分から知っているが、彼女の本好きは有名だった。耕児などの及びもつかないほど、たくさんの本を読んでいるであろう。現に、彼女の手にあるのも、彼の知らない作家の著書であつた。

「わたし、よく知らないけど……」

と、和美は答えた。「だれかが、黒板に、いたずら書きしたようよ」

「いたずら書き」

「ええ」

それだけいうと、和美は、また視線を本にもどす。

耕児は、黒板のほうへ進んだ。

阿倍野六中九大地獄——という、大きな文字が、彼の目に映つた。

その横に、へたな鬼の絵がいつぱい描かれ、次のようなことばがしるされていた。

英語Ⅱ発音地獄。

数学Ⅱ公式地獄。

国語Ⅱ文法地獄。

理科Ⅱ宿題地獄。

社会Ⅱ暗記地獄。

体育Ⅱロボット地獄。

音楽Ⅱヒステリー地獄。

美術Ⅱ自分の目で見る地獄。

家庭Ⅱお行儀地獄。

耕児は、ぼかんとしてそれをみつめていたが、すぐに、ゲラゲラと笑いだした。あまりにもうまく各科目の先生の教えかたの特徴をとらえているので、おかしかったからである。

が、その笑いは、ひとりの女生徒のするどい声に封じられた。

「はずかしくないの？」

それは、西沢響子にしざわきょうこという、秀才で知られた生徒だった。

「こんなことでいいの？」

西沢響子は、集まっている連中にむかつて叫んだ。

「こんなことを黒板に書く人が、うちのクラスにいるなんて……みんなよくそれで平気ね！」

「……………」

「いくら学校でこんないたずらがはやっているからといって、うちのクラスの人まで、まねすることはないと思うわ！」

その声に、みんなは、しんとなった。

そういえば、そうかもしれない——と、耕児は思った。

このところ、安倍野六中では、いろんないたずら、というか、いやがらせがおこっているのだ。

一カ月ばかりまえには、もう卒業したが、そのときの三年生の美術部員のひとり

が、教室をピンク色にぬっているのをみつけられた。つかまえた先生にむかつてその生徒は、学校で使われている緑色が、自分たちをおさえつけているようでしんぼうできなかつたのだといったそうである。

それからまた、これは、つい三日ほどまえのことだが、放課後に流される校内放送の音楽が、いつもの、おだやかなクラシックの名曲から、突然はげしいビートのきいたロックになったことがある。どうやらいつもかけられている音楽を、何者かがロックに入れかえたらしい。この犯人はまだ突きとめられてはいなかった。

そんなことが、このところ、しばしばおきているのだ。

耕児は、これが、ひよつとすると、阿倍野六中の、勉強一本やりのムードのせいではないかという気がしていた。有名高校への進学実績を第一とするせいか、この阿倍野六中では、クラブ活動も低調で、生徒は勉強に追いまくられるようなところがある。それに耐えきれなくなった生徒が、そうしたささやかな抵抗をするのではないかと、漠然と感じていたのだ。

だが。

「みんな！ この犯人をみつけ出しましょうよ！」

気がつく、西沢響子が絶叫していた。

「こんななさけないことをする人間を反省させるためにも、わたしたちは、犯人を発見しなきゃならない。そうでしょう？」

「そうだ！」

「西沢のいうとおりだ！」

何人かが、賛成の声をあげた。

「犯人がだれかは、筆跡を見ればいいのよ！」

西沢響子は、声をはりあげた。

「どうかしら。みんな、ひとりひとり字を書いて、出してもらうことにしたら？」

「そうだ！」

また、だれかがどなったが、生徒たちの大半は、顔を見合わせた。そこまでの必要があるのかという表情が、彼らの顔にあった。

けれども、まだ、クラスの委員は決まっていないのだ。この問題をどう処理すべきか討論をリードする人間はいないのである。

したがって、西沢響子の握った主導権を奪おうとする者は出ず、全員が、紙に字を